

# 【成果概要】2-3. 気候変動による印旛沼とその流域への影響と流域管理方法の検討

## 調査結果の概要

### ■ 今年度の成果

- 印旛沼の水質悪化のメカニズムとして、降水量の少ない年、日照時間の長い年は、CODの年平均値が高い関係にあることを文献調査、既往データ分析から確認した。
- 水質改善、治水安全度の向上につながる適応策メニューを抽出した。また、適応策において重要な機能を果たしうる谷津の分布状況を把握した。
- 印旛沼流域適応策検討推進協議会を立ち上げ、河川・農林・環境分野が連携する推進体制を整備した。

### 適応策メニュー

適応策メニュー	内容
A谷津での貯留	谷津に小堰堤等を設置し、降雨時の流出を一時貯留できるようにする。
B水田の遊水機能を活用	豪雨発生時等に、休耕田等に水を引き込むなど水田の遊水機能を活用し、流出を抑制する。
C水位管理	印旛沼の管理水位を低下させることで水質の改善、治水安全度の向上を図る。
D循環かんがい	低地排水路から高栄養塩水の排水量を減らす。
E排水機場を活用した沼内循環	機場のポンプ等を使い、水の流動化を図る。

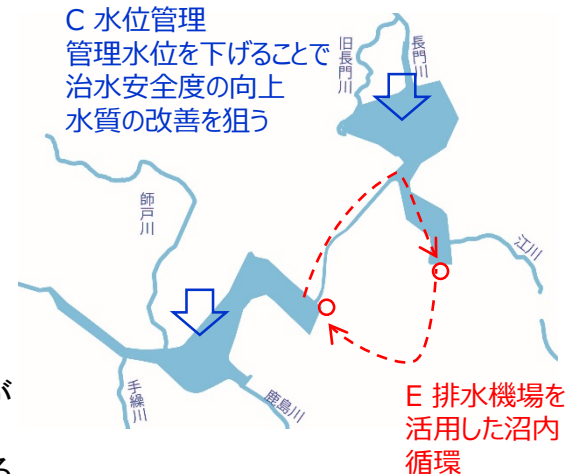
出典：パシフィックコンサルタンツ株式会社作成

### ■ 明らかとなった課題

- 水質悪化メカニズムの検討において、河川流域毎の負荷流出特性のさらなる分析の必要がある(次年度実施予定)。
- 適応策の効果予測を行うために必要なデータの充実が必要となる。現状で得られているデータを把握した上で、現地観測の計画立案・準備・調整を行う(次年度以降に観測予定)。

### ■ 来年度の調査計画

- 将来気候変動影響予測と適応策の評価手法の検討
- 適応策の具体的な検討、効果予測等に必要なデータの取得
- 協議会の継続開催、河川・農林・環境が連携した検討を実施する体制を維持



### 適応策メニューの例

図中のA、C、及びEは表中の「適応策メニュー」に対応。  
 出典：東邦大学作成(上図)  
 パシフィックコンサルタンツ株式会社作成(下図)